

# 中洞 正氏

自然を活かし牛を活かす「山地酪農」  
20世紀の農業価値・体制への挑戦



苦難の半生を淡々と語る中洞さん

夏は東北に飢饉をしばしばもたらす「やませ」の影響を受け、冬はマイナス20℃近くまで下がる酷寒の地である岩手県の「北上山地」は、戦後しばらくの間「日本のチベット」と呼ばれ、非常に貧しい地域であった。その当時を中洞牧場社長、中洞正さんは次のように語っている。

## ●日本のチベットと呼ばれた北上山地が 中洞さんのDNA

「私は昭和27年に岩手県宮古市の農家に生まれました。住んでいたのは北上山地の山中の自給自足的な集落でした。父は馬喰（ばくろう）で北海道から関東までを飛

び回りほとんど家にいませんでした。家では酪農をやっておりまして、搾乳、エサやり、糞だし等、母と一緒によく働きましたね。高校は岩泉町にある岩泉高校の農業科に行き、寮生活をしました。20人位の寮生がいました。ここでも酪農を勉強しました。

岩泉高校は辺鄙な場所にありましたので、元気のある若い先生が新任教員として赴任してきました。寮でしたから舎監で毎日いろいろな先生が交代で来て一緒に寝泊りをします。先生方は熱心に大学での生活を話してくれます。また、勉強も手取り足取り教えてください。勉強嫌いの私も次第に成績が上がり、勉強が面白くなってきました。「頑張れば大学にも入れるぞ」という甘い言葉に乗せられ獣医を目指しました。

父親の事業は私が中学生の時に破産しましたので、中学卒業後に母親と一緒に出稼ぎにもいきました。しかし、どうしても高校に入りたくて、1年遅れて高校に入学しました。高校卒業後集団就職で肉屋のチェーン店で働きました。社長が岩泉出身の方で、岩手県内からの苦学生の面倒を見てくれました。ここで学費を稼ぎながら受験勉強をしました。しかし、獣医学部の壁は厚く2年浪人してユニークな教育をしている東京農大の農業拓殖学科に入りました。

東京農業大学では、学費を稼ぐためのアルバイトと『山地酪農研究会』というサークルでもっぱら活動しました。

中洞さんが一貫して追及してきたのは、山地酪農である。しかし、自然の力と動物の生命を大切にする山地での自然放牧を基幹とする山地酪農は、施設や大型機械の導入、そして穀物中心の配合飼料を活用した多頭飼育と、1頭当たり乳量の飛躍的増大をもたらす近代酪農とは全

く相容れない生産方法であった。そのため、中洞さんは様々な困難にぶつかり翻弄されながら、近代農学の常識や農業近代化政策、さらには農協と対峙してきた。何が、ここまで中洞さんを駆り立てたか、その原動力を次のように語っている。

### ●山地酪農研究会との出会いが 中洞さんの将来を決定づけた

「東京農大入学当初は、ブラジルで酪農をやろうと夢にみていました。しかし、人生が180度変わったのは、『山地酪農研究会』というサークルに出会ったからです。それまでの私は、中学卒業と同時に母親と一緒に出稼ぎで働いた埼玉県深谷の大規模酪農家の経営を理想と考えていました。35年前に100頭以上の牛が飼養され、10人以上で手絞りで牛乳を搾っていました。手絞り作業は慣れない私には非常に苦痛でした。2～3頭絞ると二の腕がパンパンに腫れ上がってしまいます。ある日その経営にパイプラインが導入され、きつい乳搾り労働から解放されました。近代酪農の凄さに感動しました。

しかし、山地酪農研究会に参加して初めて見た『山地酪農に生きる』という8ミリ映画に大きな感動を受けました。ここでは、厳しい大自然の中でたくましくかつ健康に生きている牛と、それを飼う人間の優しさが描かれていました。実は深谷の大規模酪農家では近代酪農の素晴らしさと同時に、大きな問題点にも出会いました。それは、そこで飼われている牛に目が見えなかったり、満足に歩けないなど、奇形の牛がいたことです。

それ以降、山地酪農研究会にのめり込みました。それとともに、血液や遺伝子だけを勉強する大学教育にも疑問を感じて実習に没頭しました。北海道や八ヶ岳などで山地酪農を実践している素晴らしい先輩や理論家の下での実習は本当に勉強になりました。そうした過程で、海外雄飛という夢ではなく、『日本の山を開拓する』という

新しい夢が生まれてきました。というのも、山地酪農研究会で徹底的に洗脳されてしまったのです。当時10人以上の仲間がいましたが、現在まで継続して山地酪農を実践しているのはサークルを作った先輩1人と私しかいません。

山地酪農研究会を指導してくださったのは、当時草の神様とも呼ばれた植物学者の猶原恭爾博士でした。シバ主体の草地の重要性を提起されるとともに、自ら荒川の河川敷で牛を飼い山地酪農の理論を開発しました。先生の指導は具体的な技術を指導するのではなく、山地酪農に取り組む精神の重要性を徹底的に教え込むというものでした。二宮尊徳や新渡戸稲造の話をよくしてくださいました。また、『日本の山の植生は最終的には野芝になる』『芝以外に日本の山にあった放牧用の草はない』『乳牛は年間4000kg以上搾ったらだめだ』という指導を受けました。近代農業路線を突っ走っていた当時は、全く時代に逆行する理論でした。当時はだれもその理論の重要性に耳を傾ける人はいませんでした。しかし、現在、BSE、鶏インフルエンザ、雪印問題が発生し、いかに山地酪農の考え方が重要であるかが理解されるようになりました。先駆的な考え方が浸透するまで30年近くかかってしまいました。この間、志を貫徹するのは実に大変でした。」



近代酪農の導入の義務づけと多額の負債を抱える

乳脂率3.5に挑戦した  
エコロジー牛乳



## ●しかし、山地酪農の実践は苦勞の連続、 孤独な戦いであった

「山地酪農に夢を賭けていましたが、家の酪農経営は父親の倒産でだめになり、地域からの信頼も全くない状態、すなわちマイナスからの出発だったのです。すなわち、土地も金もない、信用もないため借金もできませんでした。そのため、日雇いをしながら細々と牛を飼う生活が7年間も続きました。出口は全く見えず、本当に参りました。自分の人生の中で一番つらい時期でしたね。

にっちもさっちも行かない時に突然舞い込んだのが、岩手県が推進していた北上山系開発事業による大規模酪農開拓への入植要請でした。一大決心をして入植したのが昭和59年です。配分面積は50haで、12haがすでに草地造成されていました。しかし、参加してみてもないところに参加してしまったと後悔してしまいました。というのは、まず、技術指導に来る先生方は、牛の生理生態や草の植生を無視した教科書的な近代酪農技術の受け売りの指導しかしません。それに反する技術は、全く聞く耳をもってくれません。一方、行政は会計監査にばかり頭がいて、同時に入植した3人に全く同じ投資と飼養方式を義務づけ、全く融通がききませんでした。自分の経営に不必要な過剰な施設整備や機械の購入でしたが断ることもできません。これまで、私個人では100万の借金もできませんでした。しかし、入植するとともに借金はあっという間に7,000万にも膨れあがってしまいました。これが、マスコミをにぎわした北上山系事業の負債問題をもたらすのです。

私はこうした負債問題が深刻な19戸の農家をまとめ、県と負債問題の責任、解決方法を交渉しました。多くのマスコミが私達を支援してくれました。しかし、私は地元では村八分的な状況に陥ってしまいました。借金返済のために、様々な先生方が技術指導や経営指導にきました。その時どの先生も『飼養頭数が少ない』『1頭当たり乳量を増やせ』とオウムのように言われました。しかし、山地酪農を信頼していた私には、納得することができま

せんでした。そのため、入植以来、配合飼料を一切使いませんでした。これだけは今でも威張って言えます。結局、県を相手に行った負債責任問題も私一人が孤立してしまい、私を除く18戸の農家の利子補給を県がすることやむやみに決着させられてしまいました。

そのため、何年たっても負債は全く減りませんでした。当時、生産していた牛乳は全量農協へ出荷していました。どこかの生産者の牛乳と混ぜられて販売されてしまうため、自分が生産した牛乳に対する消費者の反応は全くわかりません。

従来の近代化路線の中で私の経営方式が持続できないことが決定的になったのが、『乳脂率3.5%』の基準です。それまでは入植農家の中で売り上げはみんなの半分しかありませんでしたが、生産コストが低いため利益はでていました。いまでこそ、健康のため低脂肪乳がもてはやされていますが、当時は『乳脂率が高い＝うまい牛乳＝消費者が求める牛乳』という考え方が支配的でした。私の牛乳は放牧で牧草中心でしたから、季節によって乳脂率が変わりますし、配合飼料をやらないのでどうしても乳脂率は低くなってしまいます。」

こうした困難の連続の中から、いよいよ中洞さんが理想とする山地酪農の確立をめざした取り組みが展開する。様々なしがらみから解き放たれ、「牛・自然環境・そして消費者に優しい中洞式山地酪農」の完成を目指した取り組みの過程を中洞さんは次のように熱く語ってくれた。

## ●中洞式山地酪農はどうして完成したか

「『乳脂率3.5基準』が導入されたとき、私は、これからは『乳脂率3.0』の牛乳で勝負しようと思った。そして牛の飼い方を含めて経営全体を見直しました。そ



四季の変化が見事な自然の中で命を燃やす中洞牧場の牛

の結果、牛に優しい経営を最優先することにし、大豆かすや麦などのエサとしてこれまで利用していた輸入穀物を全て経営から排除しました。また、『良い食品づくりの会』の会員となり、会員による目隠しテストでは中洞の『乳脂率3.0牛乳』がダントツで高く評価されました。また、本物の美味しさを伝えるため紙パックでの販売をしないことにしました。なお『乳脂率3.5基準』が導入されて、それまで細々と経営を続けてきた山地酪農の仲間、当時60人位いたと思いますが、ほとんどの経営が崩壊しました。この段階で、日本の酪農業界は放牧を完全否定したのです。

そして、平成4年頃から自分でペットボトルに生の牛乳を入れて内緒で売ったんです。お客は宮古市の消費者で120件くらいいました。最初は、知人に内緒だといっておすそわけしていたのですが、味が評判になりあつという間に口コミで広がり、半年でお客さんが120人位になりました。その後、地元で学校給食をやっている小さなプラントを利用してピンにつめてもらって販売するようになりました。この頃、マスコミでも随分とりあげられました。

しかし、このように自分で牛乳を販売しても農協にはマージンを払わざるをえませんでした。すなわち、農家は牛乳を農協にkg当たり80円前後で時には35円で売る

こともありました。メーカーは農協から115円/kgで購入して加工して販売していました。中洞ブランドで売り出した私の場合でも全く同様で、自分の生産した牛乳を農協に35～80円で売り、さらにそれを115円/kgで農協から買い戻して加工して販売することになりました。当時は、自分で生産した牛乳を全て販売できるほどの力はありませんでしたので、どんなに不合理でもこのルールに従わなければなりません。1頭当たりの搾乳量を下げたため、その後3年間で全生産量を自分で販売できるようになりました。しかし、牛乳加工を委託していたメーカーは農協を通した牛乳でなければ加工してくれませんでした。

メーカーに加工代金を払っていた銀行にある日若い支店長が赴任してきました。支払いにいて顔見知りになって様々な話をするようになりました。そのうち融資してくれる話が出てきました。この銀行はこれまでベンチャーには基本的には融資していませんでしたが、その支店長の一存で6,500万円の牛乳プラント建設の融資が平成9年に実現しました。その後の営業成績は右肩上がり順調に推移しましたので、今年10月までには借金はゼロになる予定です。また、農場の方の負債もほぼ完済しました。本当に大変な借金でした。今でも負債問題を思い出すと、はらわたが煮えくりかえます。自分達が



小さいけれど、隅々まで衛生的な  
中洞牧場の牛乳プラント

欲しくもない補助金を取ってきて、自分たちの意見も聞かずに勝手に施設や機械を購入して上物を作り、入植農家に1億円近い借金をさせて、返済ができないのは農家が悪い。そして、経営がうまくいかない責任を全て農家のせいにして行政や農協は全く責任をとろうとしない。おかしいと思いませんか。

平成2年頃から『らでいっしゅぼーや』が私の牛乳に注目してくれました。これで全国的に販売できると期待したのですが、まだ自前のプラントをもっていませんでしたので衛生管理、物流面で問題があり、取引までにはいたりませんでした。現在は、1日に200～300本をコンスタントに『らでいっしゅぼーや』に販売しています。

うちの牛乳は風味を損なわないために全てビン詰めにして販売しています。ビン容器の洗浄・回収など大変な点もありますが、消費者の皆様が協力してくれますので回収できています。」

山地酪農に頑固にこだわる中洞さんの姿勢は、次第に多くの消費者の心を掴むとともに、一緒に山地酪農に挑戦したいという仲間を生み出している。そうした中で中洞さんの夢は果てしなく続いている。

### 中洞牧場の「原乳生産基準」

- ・ 飼育方法は放牧である事
- ・ 飼料は安全性に疑問のあるもの、人間の食糧となるもの排除する
- ・ 哺乳は生乳を主とする
- ・ 交配は、自然交配(本交)に努める
- ・ 分娩は自然分娩に努める
- ・ 投薬は必要最小限とする
- ・ 糞尿は牧場内還元とする
- ・ 放牧地の化学肥料施肥は認めない



消費者の安全のためビンの洗浄に全神経を集中

### ●果てしなく続く中洞さんの夢

「今、私は有機栽培で牧草を作る取り組みに挑戦しています。小岩井農場と提携して採草地での有機栽培の牧草をつくる計画をしています。採草地で果たして化学肥料を使わないで十分な生産量があがるかどうか検討したいと考えています。具体的には牛乳の廃液を乳酸発酵させて、それにおがくずチップを混ぜて乳酸発酵の堆肥をつくるという試験をやっています。

また、旭川と島根でフランチャイズ形式で山地酪農を展開する計画です。牛乳プラントのノウハウも随分蓄積しましたので、プラントも含めてフランチャイズ化したいと考えています。島根ではゴルフ場用地を活用した山地酪農の実践を検討しています。

なお、来年を目標に株式を公開して投資家を募りたいと考えています。すでに、岩手県のベンチャーキャピタルが私達の株式公開に興味をしめしています。また、中洞牛乳および乳製品を専門に販売してくれる販売会社『にゅう』をさぬきうどんチェーンの社長や作詞家の秋元康さんやデザイナーのサイトウマコトさんら5人が出資して設立しました。

最近、家畜が持つ人びとへの癒し効果を有効に活用するため、社会福祉法人などに対して『山羊と創る 癒しの空間』の重要性を提案しています。本当に家畜ももつ癒し効果の活用が今後の大きな課題となっていくでしょう。」

なお、最後に中洞さんは、1000年継続できる循環型農業の確立による農家の持続の重要性を強調するとともに、21世紀の畜産の望ましい姿は「山地酪農」と「家畜福祉」であることを指摘され、3時間にも及ぶインタビューを終えた。

(聞き手：門間敏幸)